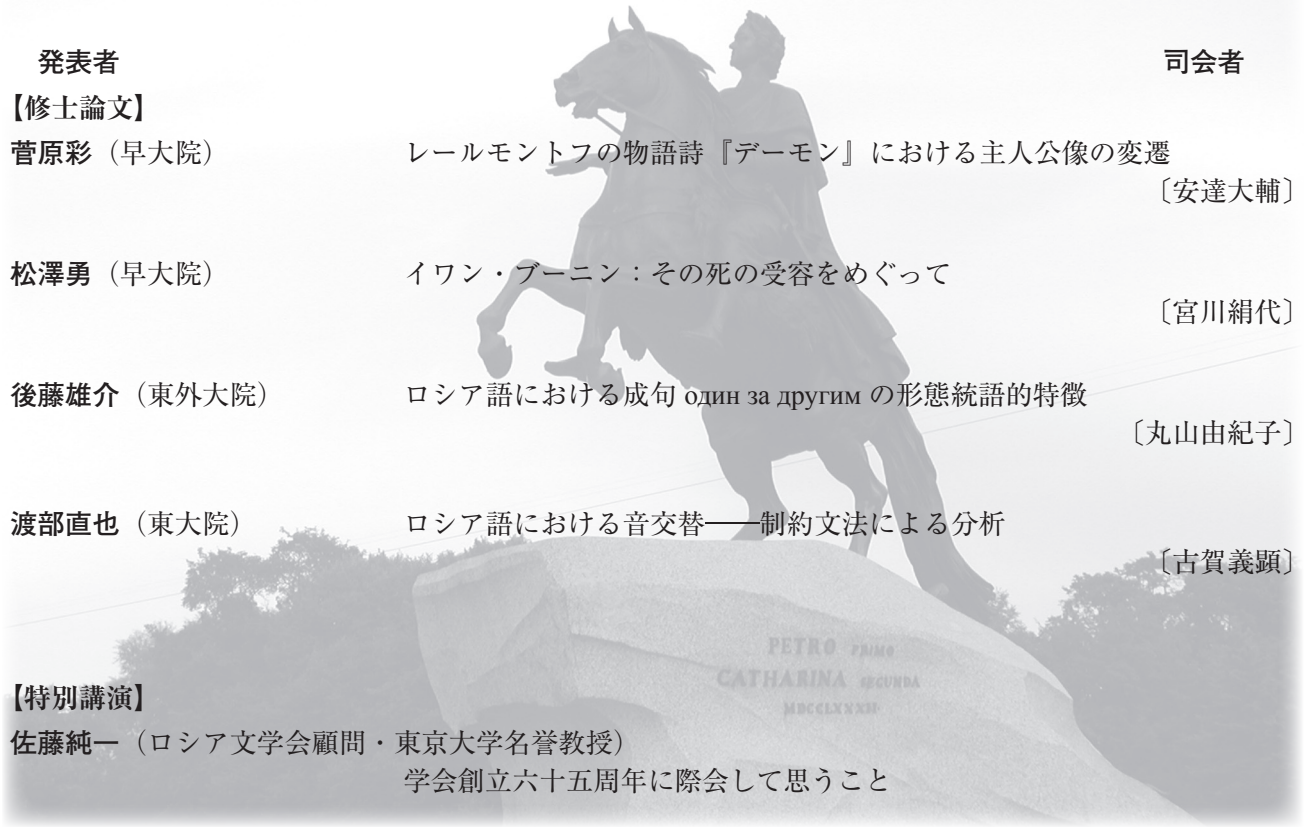
日本ロシア文学会

関東支部報 No.33（2015 年 10 月）

〒 950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050　新潟大学人文学部斎藤陽一研究室気付
日本ロシア文学会関東支部事務局
E-mail: robunkanto@gmail.com

2015 年 6 月 13 日（土）、早稲田大学にて日本ロシア文学会関東支部主催による春季研究発表会が開かれました。支部長のあいさつに続き、四本の修士論文報告、佐藤純一先生（ロシア文学会顧問・東京大学名誉教授）のご講演、支部総会が行われました。約 60 名の支部会員が集まり、懇親会も大盛況でした。



発表者		司会者
【修士論文】		
菅原彩（早大院）	レールモントフの物語詩『デーモン』における主人公像の変遷	〔安達大輔〕
松澤勇（早大院）	イワン・ブーニン：その死の受容をめぐって	〔宮川絹代〕
後藤雄介（東外大院）	ロシア語における成句 один за другим の形態統語的特徴	〔丸山由紀子〕
渡部直也（東大院）	ロシア語における音交替――制約文法による分析	〔古賀義顕〕

【特別講演】

佐藤純一（ロシア文学会顧問・東京大学名誉教授）
学会創立六十五周年に際会して思うこと

日本ロシア文学会　関東支部報　No.33

目次

[支部長あいさつ]

野中進　「総会は大事」の説 …… 1

[春季研究発表会報告要旨]

菅原彩　レールモントフの物語詩『デーモン』における主人公像の変遷 …… 3

松澤勇　イワン・ブーニン：その死の受容をめぐって …… 6

後藤雄介　ロシア語における成句 один за другим の形態統語的特徴 …… 10

渡部直也　ロシア語における音交替――制約文法による分析 …… 15

[特別講演]

佐藤純一　学会創立六十五周年に際会して思うこと …… 19

「総会は大事」の説

野中進

若いころは支部発表会でも、全国大会でも、総会に出るという頭がなかった。友人や親しい先輩と喫茶店に行き、懇親会に備えて雑談に花咲かすのが常だった（院生にとっては懇親会もそれなりに堅苦しい場だったので）。

年を取るとそういうわけにもいかず、支部でも全国でも総会に出ることが増えた。そこで気づいたのは、総会はたんなるルーティンでなく、意外に大事なことが決まっている。それも、わりと少なめの人数で、ということだ。

今年（2015 年）の関東支部総会でも重要なことが決まったので、この場を借りてご紹介したい。

それは理事多選抑制である。ロシア文学会では 24 名の理事が選ばれる（任期 2 年）。そのうち 14 名が関東支部の推薦である。全理事中、半分以上を関東支部から出すわけだ。公正かつ適切な理事選出の責任を学会に対して負っていると言っても誇張にならないだろう。

今回の変更案の柱は、（a）14 名のうち、10 名は投票によって、4 名は支部長指名（ただし支部運営委員会の承認を得なければならない）によって選出する、（b）そのうち投票枠については連続三選を認めない、の二点である。つまり理事を二期 4 年務めた人は、その次の理事選では被投票権をもたない。ただしこれだと、大勢の理事が連続三選禁止に引っかかり、理事会運営に支障を来たすことも考えられるので、必要に応じて支部長指名で何人か「復活」していただくことも許容している。したがって、実際には三期以上連続で理事を務めるケースも出てくるだろう。

6 月 13 日の支部総会でこの案が審議された。思いがけずと言うべきか、出席者の関心は高く、さまざまな議論の末、原案通り承認された。2017 年の理事選からこの措置は施行される。詳しくは、支部報本号の巻末「日本ロシア文学会関東支部規約」の「支部規約に関わる規定」の 5）をご参照頂きたい。

この措置によって、より多くの会員が理事に選ばれ、より多くの才能が学会運営で現れることを期待している。だが問題は、なぜこうした措置が必要かである。それは言うまでもなく、ロシア文学会のみならず大学や地域など、日本のさまざまな社会を襲っている世代交代の波である。もしこの波がより大きくなっていく波（つまり、より多くの人間が先行世代に取って代わる波）であるならば、あまり問題はない。問題が生じるとしても、それは波の力強さから生まれる「余波」であり、自ずと方向性は出てくるだろう（ちなみに、本号にご寄稿いただいた佐藤純一先生の学会史を読むと、1960 年代後半～ 1970 年代前半、中村白葉会長の頃がまさにそうした時期であったようだ）。

だが、今日ロシア文学会や日本社会を襲っているのは、より小さくなっていく波、ようするに尻すぼみの世代交代であり、より少ない人間が制度を受け継がないといけない。そのことが、より意識的な制度再設計を必要としているのだ。今回の措置によってより多彩な人材が理事会に参加し、学会活動に新しい方向性を打ち出してくれることを願っている。

もう一つ、今年の 11 月 7−8 日に埼玉で開かれる全国大会の総会でも重要な提案がされるはずなので、それについてもここで紹介し、会員諸氏の関心を呼び起こしたい（私が所属する国際交流委員会からの提案なので）。それは全国大会における「国際参加枠」の規約化である。実は、今年の全国大会でも試行的に「国際参加枠」が設けられた。ただし、参加費を取らない代わりに『ロシア語ロシア文学研究』への投稿権を認めないという、国際水準で見て魅力のないものであった（それでも一件申請があったのはありがたいことである）。

今回の提案は、正会員でなくとも一定の参加費を払えば、全国大会で発表でき、かつ学会誌にも投稿できるという趣旨である。もちろん、報告申請や論文投稿の審査は正会員に対するのと同様、厳格かつ公正に行われなければならない。

この案が認められれば、学会の国際化は大きく進むだろう。今では、日本のロシア研究者がロシアや欧米、アジアの国際学会に参加し、報告を行うことは珍しくなくなっている。その半面、ロシア文学会では会員でない外国の研究者の自由参加が認められていない。それが不思議と思われることさえ、あまりなかったようである。もちろん、ロシア文学会が会員制に基づく組織である以上、会費を払う正会員が学会活動の中心となるのは当然であり、今後もその仕組は根本的には変わらないだろう。だが、まったく外国研究者が参加しない学会というのもおかしいだろう。まして、日本のロシア・スラヴ研究界は本年 8 月に ICCEES 幕張世界大会を成功させたところであり、この流れを活かさない手はない。

「それはそれとしても、なぜ国際化なのか？」という問いがある。各大学で無理な国際（グローバル）化が強いられている現状、自由たるべき学会がそうした流れをわざわざ追いかけなくてもいいではないか、という声である。これに対して私はシンプルな答えを持つのみだ――「学会活動のチャンネルを増やすこと」。これに尽きる。ロシア語・英語で学術報告を行い論文を書くようになることは、例えば、地域社会への働きかけを強めるのと同様、重要である（この点、中部支部の活動に学ぶべきものが多いと考えている）。日本語でロシア文学・文化の理解・研究を深め、広めることもこれまで通り重要だ。だが、外国語を使って世界の研究者とわたり合い、交流することも大切だ。しかもそれが、たんに個々の研究者の個人的活動でなく、ロシア文学会の制度的取組として行われることが必要だ。「多チャンネルな組織になる」ことこそ、今来ている世代交代の波にうち勝つ方途であると考えられるからだ。

このように、研究発表会同様、総会でも重要な議論がなされていることをご紹介し、より多くの方が出席されるよう願う。喫茶店に行く時間がない分、懇親会で盛り上がりたい。あれもまた、日本の学会の重要な文化だから。

今年の 11 月はどうぞ埼玉にお越し下さい。

レールモントフの物語詩『デーモン』における主人公像の変遷

菅原彩

М.Ю. レールモントフの物語詩『デーモン（Демон)』（1839）は、彼の後期の代表作の一つである。天から追放されたデーモンの、地上の娘タマーラへの悲恋を描くこの物語詩は、筋立ての単純さにもかかわらず、たびたび不可解な作品とされてきた[1]。そうした評価の理由としては、主人公像の不明確さが挙げられるだろう。先行研究でもしばしばこの問題に関心が向けられてきた。例えば Д.А. ギレーエフは、それまでは「デーモンは心からタマーラを愛し全く彼女を誘惑してはいない」にもかかわらず、作品の最後に「デーモンを誘惑者と呼ぶことで、詩人は読者の当惑を呼び起こす」と述べる[2]。また同様に W.E. ブラウンは、デーモンは「悪の原理の寓意的な表現であり、また人間的に恋をする存在」であり、この 2 つは「互いに相いれない」と主張した[3]。彼らは主人公像の不明確さを、作者の自己検閲[4]あるいは創作の長期化[5]による不整合性によって説明している。

こうした見解が現れる背景には、先行作品[6]における主人公像の明確さがあると思われる。例えばアルフレッド・ド・ヴィニーの『エロア、あるいは天使の姉妹（Eloa, ou la Sœur des Anges)』（1823)[7]でのサタンは、清らかなペーリを堕天させるために詭弁を弄する、狡猾な誘惑者として現れていた。また А.И. ポドリンスキーの『悪魔とペーリ（Див и Пери)』（1827)[8]では対照的に、悪魔はペーリの同情と説得によって悔悛する存在である。一方『デー

---

[1] 例えば Д.Е. マクシーモフは『デーモン』を「不可解で矛盾した物語詩」と呼んでいる（*Максимов Д.Е.* Об изучении мировоззрения и творческой системы Лермонтова // Русская литература. 1964. №3. С. 9.）。

[2] *Гиреев Д.А.* Поэма М.Ю. Лермонтова «Демон»: Творческая история и текстологический анализ. Орджоникидзе: Сев.- Осет. кн. изд-во, 1958. С. 102.

[3] Brown W.E. *A history of Russian literature of the romantic period.* Vol. 4. Ann Arbor: Ardis, 1986. P. 207.

[4] *Гиреев Д.А.* Поэма М.Ю. Лермонтова «Демон»: Творческая история и текстологический анализ. С. 107.

[5] Brown W.E. *A history of Russian literature of the romantic period.* Vol. 4. P. 207.

[6] 『デーモン』に影響を与えた先行作品については次の資料を参照した（*Вольперт Л.И.* Лермонтов и литература Франции. Изд.2-е, испр. и доп. СПб.: Алетейя, 2008. С. 86-107; *Удодов Б.Т.* М.Ю. Лермонтов: Художественная индивидуальность и творческие процессы. Воронеж: Воронежский ун-т, 1973. С. 261-288.）。

[7] レールモントフの友人 А.П. シャン - ギレイは、『デーモン』について議論する中で、レールモントフがヴィニーのこの作品に言及したことを伝えている。シャン-ギレイが、作品から悔悛と復活のイデーを取り去り、デーモンはタマーラの魂を滅ぼすことにのみ専心するという構想を提案したのに対し、レールモントフは「君の構想は悪くない、けれどアルフレッド・ド・ヴィニーのエロア『天使の姉妹』にひどく似ているよ」と答えたという（М.Ю. Лермонтов в воспоминаниях современников. / Ред кол.: В. Вацуро, Н. Гей, Г. Елизаветина и др.; Сост., подгот. текста и коммент. М. Гиллельсона и О. Миллер; Вступ. статья М. Гиллельсона. М.: Худож. лит., 1989. С. 47.）。

[8] Б.Т. ウドドフは、この作品はレールモントフの『デーモン』に影響を及ぼしているとし、その例として両作品に共通する嵐の中の主人公描写を挙げている（*Удодов Б.Т.* М.Ю. Лермонтов: Художественная индивидуальность и творческие процессы. С. 279.）。

モン』における主人公は従来の作品と異なり、改心し救済を願う罪びととも、悪しき誘惑者とも定義し難いために、読み手に困惑を引き起こす。しかし他の登場人物の果たす役割に注目しつつ主人公像について検討すると、この不明確さは自己検閲や創作の長期化といった外的要因による欠点というよりはむしろ、作者が意図的に行っている戦略なのではないかと考えられる。本発表は、これまで否定的に捉えられてきた問題に積極的な意義を付与すべく、新たな読みを提示するものである。

『デーモン』の主人公像の特質は、他の登場人物に注目して、その初期バリアント（1829－1834）と対比する場合により際立つ。初期バリアントでは、デーモンは美しい修道女と出会うことにより愛と善を志向する。彼に起こったこの変化は、天への回帰という意味を持つ。しかし後に、彼女と共にいる天使を見たデーモンは嫉妬と憎悪にかられ、再び悪の存在となる。つまり修道女によってデーモンは過去の天における自己に近づき、天使によって現在の自己へと立ち返るのであり、これらの他の登場人物はデーモンに、かつて辿った変化を反復させていると言えよう。他者との出会いから生じるこの 2 つの主人公像はそれぞれ、デーモンの内的変化における異なる段階に属しており、同時に存在できないものである。

他方、1839 年創作の最終稿では、他の登場人物の果たす役割は全く異なるものとなる。初期バリアントと同様、ここでもデーモンはタマーラを目にすることで、愛と善を再び理解する。しかしその後、タマーラの前に現れる主人公の姿は、初期バリアントには見られなかったものだ。この時デーモンは、何ものとも定義されずかつ魅惑的な存在として描かれるが、これは自分の許に訪れてくる者の正体を知らないまま、彼に魅了されていくタマーラの目から捉えられたデーモンの姿だと考えられる。また修道院で天使と対立する場面では、デーモンは憎悪と敵意をあらわにする「悪霊」として現れる。このときデーモンを悪しきけがれた存在とみなす天使は、その場の神聖さを守ろうとするが、デーモンはその神聖さはすでに彼自身との接触によって失われたと答えて天使を追い払う。ここでのデーモンは相手の言葉に応え、天使にとっての存在、すなわち神聖さをけがす悪として天使に対峙しているのだ。

このように、タマーラの前に現れるときの主人公像にはタマーラのデーモンとの関係性が、天使と対決するときの主人公像には天使のデーモンとの関係性が反映している。他の登場人物は、自身のデーモンとの関係性において固有な主人公像を提起しているのだ。初期バリアントとは異なりこうした主人公像は内面の変化の異なる段階に属するものではなく、それぞれが相対的に真実な形象として共存しうる。『デーモン』の主人公像は一貫性に欠けているようだが、これは不整合性、欠点というよりはむしろ、他者との関係性から捉えられた複数の主人公像の並立と言えるだろう。

最後に以上で示した『デーモン』における主人公像の創作史的意義に触れておく。1 つの絶対的な主人公像に代わって、複数の相対的な主人公像が提示されたことにより、読者には豊かな解釈の可能性が広がることになった。デーモンはタマーラから見れば神秘的な未知へと誘う「訪れ人」であり、同時に天使にとっては悪しき「けがれた霊」だった。デーモンの本質、彼の真意を明かす唯一の答は存在しないのだ。そしてこの点において、『デーモン』とほぼ同時期に書かれた小説『現代の英雄』（1837－1840）とのつながりを見出すことができる。

『現代の英雄』では、マクシーム・マクシームィチ、カフカースを旅する「私」、そしてペチョーリンという 3 人の語り手が現れ、それ故に三様の関係性にもとづいたそれぞれ異なる

主人公像が生じることになる。読み手に与えられるのは統一的な主人公像ではなく、「互いに至極緊密に関連づけられてはいないような、幾つかのかなり異なるペチョーリンたちという万華鏡」[9] なのだ。唯一の主人公像が与えられていないために、読者の答を求める探求は終わりがないものとなる。A. バラット、A.D.P. ブリッグスは次のように指摘している。

> 彼［ペチョーリン;引用者注］を理解する助けとなるような仮説を立てようとする間、我々は絶えずテクストの中の空隙と沈黙に突き当たる。それによってどんな仮説も決定的な真実という地位を得はしないということが確実になるのである。[10]

創作時期の重なるこの 2 作品、『デーモン』と『現代の英雄』は共に、複数の相対的な主人公像を提示し、主人公に関する「決定的な真実」を欠如させることによって、読者に新たな読解を促す試みと言える。レールモントフの初期創作の総決算と見なされることもある『デーモン』だが [11]、この点において後期の代表作である『現代の英雄』との近さを見出すことができるのではないだろうか。

---

[9] Lesic-Thomas A. *Focalization in Pushkin's Eugene Onegin and Lermontov's A Hero of Our Time: Loving the semantic void and the dizziness of interpretation* // The Modern Language Review. Vol. 103. №4. 2008. P. 1078.

[10] Barratt A., Briggs A.D.P. *A wicked irony: the rhetoric of Lermontov's A hero of our time*. Bristol: Bristol Classical, 1989. P. 134.

[11] 例えば Д.Е. マクシーモフは、『デーモン』について、「レールモントフがすでに青春期のうちに見いだしたものの、一種の結晶化、総括である」と述べている（*Максимов Д.Е.* Поэзия Лермонтова // М.Ю. Лермонтов. Полное собрание стихотворений: В 2 т. Т. 1. Стихотворения и драмы. Л.: Сов. писатель, 1989. С. 43.）。

イワン・ブーニン――その死の受容をめぐって

松澤勇

はじめに

イワン・ブーニン（1870－1953）は農奴解放後 10 年弱を経た没落貴族階級の出で、生涯その誇りを胸に潜め、また自身、自伝的小説 «Жизнь Арсеньева»（『アルセーニエフの青春』）でも語っているように、「幼児期から研ぎ澄まされた死の感覚をもった人」であった。従って彼の作品世界については「恋愛と死」、「死や永遠に対する時間感覚」、「伝統的ロシア文化（農民生活を含めた）への郷愁」、「正教と東方思想」などといったテーマで論じられることが多い。そしていずれも彼が生来死を強く意識した人間であることを基軸としているが、彼の死に対する意識の内実そのものを深く言及したものは目にし得なかった。

本稿はそうしたブーニンの死に対する意識を掘り下げ、彼がこだわり続けた死の問題がいかなるもので、どのような精神的苦闘を続け、特に前半生においてひとまず彼がたどりついた境地がいかなるものであったかを探る試論である。結論的なことを先に述べれば、彼の鋭敏な死に対する感覚が引き起こしたことは「死の受容」の問題ではなかったか、そのために彼は人生の大半を創作と旅に充てたが、それは避け得ぬ死の恐怖にいかに打克ち、死を受容して生きる生のありかたを求めた苦闘そのものであったと言えるのではなかろうか。そしてそこから、自身の問いの解が文学や教義などといった観念的な世界に存するものではなく、「生身（なまみ）」の精神世界――例えば死を無意識に超えて生きるコサックの魂や、あるいは生死の融け合った生を生きる人々の精神世界そのものにあるという確信に辿りついたということが見えてきた。

この試論の展開にあたっては、初めに彼の鋭敏な死に対する感覚が醸成されてゆく過程とそこで展開された苦闘を伝記的資料から探る。次に、苦悶する彼に鉄鎚を打ち込んだタラス・シェフチェンコの存在や彼の作品世界、及びコサックの世界、さらにブーニンが傾倒したウクライナ（当時の Малороссия）文学や彼自身による散文作品に触れ、最後に彼の前半生の集大成的な作品『村』をとりあげる。そこでは作者ブーニンの投影でもあるクジマなる人物に焦点を当て、彼の二人の古老との出会いを通じて新たな精神境に辿りつくという軌跡を作者ブーニンと重ね合わせてみることにした。

1　ブーニンの生涯と創作活動概観

彼の亡命（1920）までの半生は、ナロードニキによる社会変革の動きとそれに対する反動、ペシミズム、トルストイ主義、ニーチェ、デカダン、シンボリズム、さらにマルクス主義の台頭をみるといったまさに激動の渦中にあった。そうした中、彼は文壇の潮流には距離を置き、周囲の社会的な問題よりも主に自身の「生死の問題」と闘った。貴族の末裔としての誇りや敬虔な母の信仰の姿を精神的土台とし、やがて芸術的感性豊かな家庭教師やナロードニキ運動に傾倒する長兄によって彼の感性は醸成されていった。ギムナジウム退学後、独学で

プーシキンやレールモントフ詩に倣いながら詩作に入り、初めは田園や青春の憂愁、時にはナロードニキへの共感[1]を詠み、翻訳詩にも取り組む。その一方でトルストイ主義にも深い関心を寄せる。それはトルストイが日頃から東洋哲学や『ドゥホボール教徒』救済事業と取り組みながら常に死の意識と向き合いつつ人生の格闘を続ける姿に対するものからであった。しかし、やがてトルストイへの壁をも感じ始めていく。

またこうした時期、タラス･シェフチェンコの作品世界に出会い、衝撃的な感動を受ける。さらにそこからウクライナの地の民衆の歴史やコサックの魂に引き寄せられながら、自らを覆う死の問題の解の糸口ともなるべき世界をこうした所に求めることになる。

2　タラス・シェフチェンコ詩世界との出会い[2]

10代の終わり、エレーツ出身の独学の詩人E.И. ナザーロフを知り、それを機にシェフチェンコの詩世界[3]に惹き寄せられてゆく。当時について彼が語ってくれた内容をВера Муромцева夫人は次のように綴っている。

> 「ブーニンはいくばくかの金を稼ぎ、古くからの町Канев の近くにあるシェフチェンコの墓を詣でることを思い立った。すでに1年半シェフチェンコは彼の中で偶像化しており、様々な機会に語り綴っているように彼をロシア文学の誇るべき偉大な詩人とみていた。もちろん、お金は余裕がなくきちきちであったため三等列車に乗り、ドニエプル河を薪を積んだ粗末なだるま船で航行した。彼はよく私に、『この初めてのМалороссия への旅は全く鮮明に残っていて、そのときからすっかり惚れ込んでしまい、そして祖国のえも言われぬ美を自分の詩に体現した一農民タラス・シェフチェンコに魅了されてしまったよ。』と語ってくれた。そして、偉大な人の墓の中でもシェフチェンコの墓ほど私の心を動かしたものはないと言っていた。」[4]（拙訳）

故国のため命を省みず闘うコサックを描いたシェフチェンコの世界に若きブーニンの心は震え立つほどの衝撃を覚え、その時の感動は後に«Казацким ходом[5]»（『コサック行軍』1898）、«На край света[6]»（『世の果てへ』1894）、あるいはコサックが信奉する旧教的世界へ

---

[1] 1887年に初めて投稿した詩『ナドソンの墓の下に』が雑誌«Родина» に掲載された。

[2] シェフチェンコ作品との出会いは運命的で、農奴出のシェフチェンコの生涯に道筋をつけたのがブーニン一族出のB.A. ジュコーフスキーでもあった。

[3] «Из“Кобзаря”Т.Г. Шевченко и украинские мотивы»（И.А ベロウーソフ訳）を手にしたことによる。«Кобзарь» とはウクライナの民族楽器、またそれを奏でて歌う盲目の吟遊詩人のこと。

[4] Летопись жизни и творчества И.А. Бунина. Т. 1. М.: ИМЛИ РАН, 2011. С. 69：これは二人の往復書簡でブーニンが1890年6月頃を回想して夫人に語った内容。

[5] ザポロージェコサックの末裔が漕ぐ舟でドニエプルを渡河、シェフチェンコの墓やコサックの本営Сечи などをめぐりながら自分の生に思いを馳せるといった紀行文。

[6] かつて«Дума» にも詠われた誇り高いコサックの村で、貧困のために故郷を捨て極東ウスリースクに向かう者を見送る老人に作者が思いを馳せたコサック村鎮魂の短編。

と思いを馳せる «Эпитафия»[7]（『墓碑銘』）（1900）などといった作品を生んでいった。ブーニンは彼らの死を超えた世界こそが自身の問題の鍵の在り処であるという確信めいたものを捉えたと考えられる。

3　小説『村』（1910）鑑賞

この作品は、革命前夜の村を舞台に、農奴を放免されたクラーソフ一家から出た二人の兄弟が、農奴解放後 40 年余りの「遅れた、貧しい、悲惨な」農村を生きる様を描いたものである。兄チーホンは現実を泥臭く生き、弟クジマは対照的に詩や文学を通して人生の充実を夢みながら現実と理想の狭間で苦悶する人間である。今回は作者ブーニンの投影でもある弟クジマに焦点を当て、彼の生き様を追いながらブーニン自身の精神的苦闘と重ね合わせてみた。まずクジマは、自らを「アナーキスト、風変わりな露西亜タイプ」と言い、教会には冷めた目を向け、「意味のある人生」を追い続ける。彼は単調な村での生活を卑下していたが、そこで出会ったバラーシキンとイワーヌシカという二人の老人によって、彼はそれまでの自身の生き方が粉砕されることになる。以下、クジマとその二人の老人との出会いの意味を考える。

◯バラーシキン老人の文学観

この老人はロシアの悲惨な現実を徹底的に綴りながらも刊行することなく生を終えた人物で、クジマの自称「独学」的態度を粉砕した。彼はプーシキンやレールモントフ、シェフチェンコ、ドストエフスキー、ゴーゴリといった自国の偉大な文学者たちを最終的に追いやった原因が「全露西亜国民の蒙」にあると断ずる。衝撃を受けたクジマは、こう対抗するしかなかった。

クジマ：プラトン・カラターエフ―これこそわが国民の立派なタイプです！
バラーシキン：お前のカラターエフなんか虱に食われろ！そんなものに理想なんかありはせんのだ。
クジマ：それぢや、露西亜の殉教者たち、苦行者たち、聖者たち、狂信者たち、分離派教徒たちは一体どうなるんです？（中村白葉訳）

クジマの反駁にその老人は黙するだけであったが、クジマは後に老人の生涯に裏付けられた言葉の意を悟る。自身の独学の浅さを痛罵され、それまで求めてきた生や死の意味がもろい観念的世界のことにすぎず、そこには実感が希薄なことをクジマは認めざるを得なかった。

[7] 村で目にした «голубец»（柱型墓標）からポクロフ（生神女庇護祭）などに思いをめぐらし、生神女マリアを労働の支えとして生きてきたものが近代化の波によって大きく様変わりする村人の世界に心痛める。そこには教義を越えた生と死の融合した精神世界があったことを綴る作者の瑞々しい感性がとらえた作品。

◯イワーヌシカ老人の死

この老人は教義よりも迷信に支えられた信仰を持ち、生前は死を忌避しながらも死に際には安らかに死を受容していった。この現前する死によって、クジマは「死を超える時空間」の存在を感得した。それはこれまで人生の意味や死の克服の可能性をめぐって苦悶し続けたクジマがこの「生身（なまみ）」の老人の死によって解の糸口を確かにとらえた瞬間でもあった。

物語の最後、こうした老人との出会いを経てクジマはそれまで忌避していた村での生活を受け容れるようになる。このことは、作者ブーニンが自身の問いの解となるものが「生身（なまみ）」の「生死を超えた」世界に存し、そこに「死の受容」ということの可能性を確信し得たということに重なり合ってくるのものではなかろうか。

おわりに

1960 年代後半に学生生活を送った筆者にとって、純真な社会的正義感を持つ一方で個人的な生と死の問題が脳裏を去らなかったブーニンの苦悩は親しみを覚えるものであった。今回の試論は浅い抽象の域内のものであったが、死と恋愛の回想を主とする彼の亡命後の作品理解にもわずかながらの役割を果たし得るのではないかと考える。

主な参考文献

Летопись жизни и творчества И.А. Бунина. Т. 1. М.: ИМЛИ РАН. 2011.

Бабореко А.К. И.А. Бунин: материаллы для биографии. М.: Художественная литература. 1967.

Бунин И.А. Собрание сочинений. Т.1, 2, 3—9. М.: Художественная литература. 1965-1966.

ノーベル文学賞叢書 17：『村』（中村白葉訳、今日の問題社 1942）

ロシア語における成句 один за другим の形態統語的特徴

後藤雄介

1. はじめに

ロシア語には「次々に～」を意味する один за другим という成句がある[1]。この成句は、例えば次のように用いられる[2]。

（1）Он делает　одну　　ошибку　　за　　другой.
　　one-acc.sg.f　mistake-acc.sg.f　after　another-ins.sg.f
「彼は次から次へと間違いをする」（東郷他 1988: 523）

（2）К концу пятого курса все мои　подружки　одна　　за　　другой
　　friend-nom.pl　one-nom.sg.f　after　another-ins.sg.f

　стали　выходить　замуж.
「5 年生の終わり頃には、私の女友達皆が次々と結婚し始めた」（НКРЯ <08.08.2014>）[3]

さらに、次の例のように名詞の数に揺れが見られる場合もある。

（3）Я читал　одну　　за　　другой　　книгу / книги.
　　one-acc.sg.f　after　another-ins.sg.f　book-acc.sg.f/book-acc.pl
「私は次々に本を読んでいった」

このように、один за другим という成句は名詞との位置関係により異なる形態統語的特徴を示す[4]。本稿の目的はこの位置関係の違いを基にして形態統語的特徴を形容詞、один および сам との比較を通して提示することである。

---

[1] один за другим を用いた例文の内、筆者が作成したものはネイティブ・スピーカーによる確認を取った。

[2] グロスは Leipzig Glossing Rules（http://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php）を参考に以下のようにした。ただし、適宜変更を加えている。nom=nominative、dat.=dative、acc.=accusative、ins.=instrumental、sg.=singular、pl.=plural、m=masculine、f.=feminine、n.=neuter、an.=animate。なおグロスは議論に必要な所にのみ示した。

[3] ロシアナショナルコーパス（Национальный корпус русского языка）から例を引用する際は НКРЯ と記す。また確認した日付を付した。

[4] 以下では、例（1）のように名詞が один と за другим の間にあるタイプを内部型、例（2）のように名詞が один за другим の外側にあるタイプを外部型と呼称する。

2. ロシア語における形容詞、один および сам について

ロシア語における形容詞、один は定語と述語の用法があるが、述語用法の場合、格に関して振る舞いに違いがある。Bailyn（2012: 176）によると形容詞は造格となるか指示する対象[5]と同じ格となり得るが（例 4）、один は決して造格にならず、先行詞と同じ格になる（例 5a, b）。またいわゆる Second Dative となることがある（例 5c）。

（4）Я встретил своего　друга　пьяного / пьяным.
　　friend-acc.sg.man　drunk-acc.sg.man/drunk-ins.sg.m
「私は酔っぱらっている友人に会った」（Franks 1995: 222）

（5）（a）Тарас　один / сам　дома.
　　Taras-nom.sg.m　alone-nom.sg.m/oneself-nom.sg.m
「タラスは家で一人だ / タラス自身は家にいた」（Madariaga 2006: 72）
　（b）Тарас пришел　один / *одним.
　　alone-nom.sg.m/alone-ins.sg.m
「タラスは一人でやってきた」（Madariaga 2006: 46）
　（c）Маша попросила　Ваню　прийти　одному.
　　Vanja-acc.sg.man　alone-dat .sg.m
「マーシャはヴァーニャが一人で来るよう頼んだ」（Franks 1990: 240）

また、Comrie（1974）を始め多くの文献では один に加えて сам も同様の振る舞いを見せることを指摘している。しかし、сам にも述語としての機能があるとは必ずしも言えない。なぜならば、次の例のように сам を単独の述語として使用出来ないからである。

（6）Тарас　один / *сам.
　　Taras-nom.sg.m　alone-nom.sg.m/oneself-nom.sg.m
「タラスは一人だ / タラスは自身だけだ」

3. один за другим の特徴および形容詞、один、сам との違い

3. では成句 один за другим の特徴を確認し、形容詞、один および сам との相違点を示す。

まず内部型において、один は名詞と性、数、格および有生性に関して全て一致する。また другой については名詞と性、数に関して一致する。格に関しては前置詞 за の格支配により造格となる。

（7）Мы пролетели　один　двор　за　другим.
　　one-acc.sg.m　yard-acc.sg.m　after　another-ins.sg.m
「私たちは次々に敷地を飛びこしていった」（НКРЯ <07.01.2013>）

[5] 以下では Franks（1990）、Madariaga（2006）などの先行研究に倣い、「指示する対象」を先行詞（antecedent）と呼ぶこととする。

次に外部型であるが、名詞の数に関して内部型とは異なる振る舞いを見せる。すなわち、名詞が複数であっても один と другой は単数が可能であり名詞の性を反映する（例 8）。この点に関して один および сам とは振る舞いが異なる（例 9）。しかし、形容詞とは違い造格にならず、さらに Second Dative となり得る（例 10a, b）。

（8）（...）Аполлон, бог искусств, убивал одного за другим всех
one-acc.sg.man after another-ins.sg.m

детей Ниобеи,（...）
child-acc.pl.man
「（...）アポロン、すなわち芸術の神は次々にニオベーの全ての子供を殺して（...）」
（НКРЯ <08.01.2013>）

（9）（a）Они пришли *один / *одна / *одно.
they-nompl alone-nomsg.m/alone-nomsg.f/alone-nomsg.n
（b）Они пришли *сам / *сама / *само.
they-nompl oneself-nomsg.m/oneself-nomsg.f/oneself-nomsg.n
「彼らは自分たちだけで来た」

（10）（a）Они пришли один / *одним за другим.
one-nomsg.m/one-ins.sg.m after another-ins.sg.m
「彼らは次々にやってきた」
（b）Он просил нас не ездить к нему одному за другим.
we-acc.pl.an one-dat.sg.m after another-ins.sg.m
「彼は私たちに、彼の所へ順々に行かないよう頼んだ」（Testelets 2001: 277）

さらに、次の例から分かるように один за другим は単独で述語として使用することが出来ない。そのため、сам と同様に先行詞と叙述関係にないと考えられる。

（11）*Они один за другим.
they-nompl one-nomsg.m after another-ins.sg.m
*「彼らは次々だ」

以上の点から、один за другим は один および сам と格の振る舞いは同じであるが、叙述関係に関しては один ではなく сам と同じ振る舞いを示すことが分かる。

4. один および сам と один за другим の句構造の違い

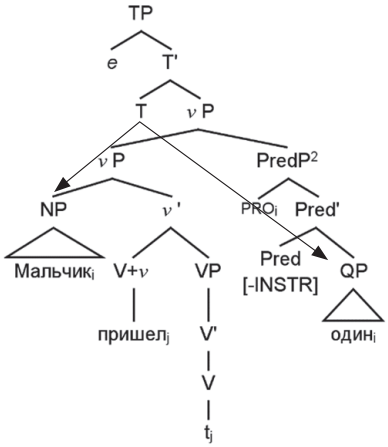
3. にて один および сам と один за другим は同じ格の振る舞いを示すが、叙述関係において異なる振る舞いを示すことを述べた。4. ではこの 2 点を Bailyn（2012）における分析を基にこれらの語句の句構造を検討する。

Bailyn（2012）は、二次述語形容詞が造格になる場合 [+INSTR] の素性を持つ Predication Phrase（以下、PredP）の主要部 Pred が造格を付与すると考えている。他方、二次述語形容詞および один、сам が先行詞と同じ格になる場合には PredP のない、同格の付加詞（appositive adjunct）と考えている。格の振る舞いの観点から成句 один за другим は同格の付加詞として分析が可能だと考えらえる。しかし、この分析では先行詞と同じ格になる二次述語形容詞と один の場合、PredP が無いと考えると先行詞と叙述関係にないことになってしまう。さらに один と сам および один за другим とでは叙述関係に違いがあるにも関わらず同じ句構造になってしまう。

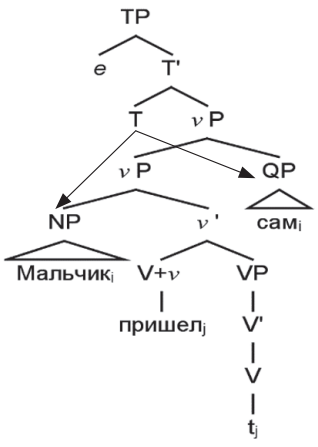
この点を踏まえ、один の場合は Bailyn（2012）が棄却した造格を付与しない [-INSTR] の素性を持つ PredP があると考える。他方、сам と один за другим に関しては同格の付加詞と分析する。

（12）（a）Мальчик　　пришел　один / сам.
　　boy-nomsg.m　　alone-nomsg.m/oneself-nomsg.m
「少年は一人で / 自分だけでやって来た」（Madariaga 2006: 48）

（b）

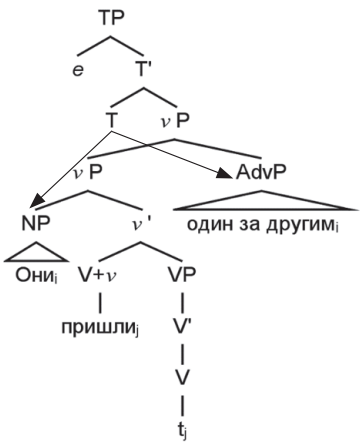


（c）



（13）　（=10）（a）Они пришли один за другим.
「彼らは次々にやってきた」

（b）



このような句構造を想定することでодин、самとодин за другимは同じ格の振る舞いを示すこと、そしてPredPの有無によって叙述関係が異なることを示すことが出来る。

5. まとめ

本稿では成句один за другимについて形容詞、одинおよびсамとの比較を通して、この成句の形態統語的特徴を名詞との位置関係の違いを基にして検討した。その結果、格の振る舞いの観点からは（外部型の場合）один、самと同じ特徴を示すが、叙述関係に関してはодинではなくсамと同様の振る舞いを示すことが分かった。この2点から、Bailyn（2012）の研究を基にこれらの語句の句構造の違いを議論した。すなわち、одинはPredP内にあると考え、самとодин за другимはPredPのない、同格の付加詞として分析した。

参考文献

Bailyn, J. (2012) *The Syntax of Russian*, Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, B. (1974) “The Second Dative: A Transformational Approach”, in Brecht, D. and C. Chvany (eds.), *Slavic Transformational Syntax*, pp.123-150, Ann Arbor: The University of Michigan.

Franks, S. (1990) “Case, Configuration and Argumenthood: Reflection on The Second Dative”, *Russian Linguistics*, 14, pp.231-254.

_____, (1995) *Parameters of Slavic Morphosyntax*, Oxford: Oxford University Press.

Madariaga, N. (2006) “Why Semi-Predicative Items Always Agree”, *Journal of Slavic Linguistics*, 14 (1), pp.45-78.

Testelets, Y. (2001) “Distributive Quantifier Float in Russian and Some Related Constructions”, in Zybatow, G., U. Junghanns, G. Mehlhorn & L. Szucsich (*eds.*) *Current Issues In Formal Slavic Linguistics*, pp.269-279, Frankfurt am Main: Peter Lang.

東郷正延、染谷茂、磯谷孝、石山正三（1988）『研究社露和辞典』、研究社。

ロシア語における音交替――制約文法による分析

渡部直也

1. はじめに

（1）に示すように、ロシア語では様々な音交替が観察される。本発表ではこのうち硬口蓋化（軟子音への交替及び口蓋音化, 1a）、アクセントのない母音の変化（1b）、出没母音（1c）を対象に、音韻的制約に基づいた文法モデルで分析を行う。

（1）ロシア語における音交替
  a. 硬口蓋化（口蓋音化および軟化）
    во[д]а ~ во[д’]е; слу[г]а ~ слу[ж]ить
  b. 母音弱化
    сл[о́]во ~ сл[а]ва́; слов[а́] ~ сло́в[ə]; д[е́]ло ~ д[и]ла́; р[’а́]д ~ (в) р[и]ду́
  c. 母音削除（出没母音）
    ог**о**нь ~ огня; д**е**нь ~ дни

生成文法的音韻論の枠組みでは種々の音韻現象について、話者の記憶する一定程度抽象化された音韻形態（基底形）に対して規則や制約が適用されることで発音（表層形）が定まると説明してきた。ここで問題とされてきたのは、同種の音韻環境において起こる現象が一様でない場合（音韻論的に「不透明な」現象）である。

本発表では、ロシア語の音交替が、先行研究で提示されてきた抽象的な基底形を仮定することなく、また、違反可能な制約の序列を定めることで派生の中間段階も仮定せずに説明できることを提示する。

2. 先行研究

（2）に示すように、ロシア語を含むいくつかのスラヴ諸語では、後部口蓋子音（/к, г, х/）の硬口蓋化は一様ではなく、軟化（軟子音への交替）と口蓋音化（ч, ж, ш への交替）の 2 種の交替が観察される。

（2）ロシア語における硬口蓋化
  a. 口蓋音化：слуга ~ слу[ж]ить　（動詞の派生）
  b. 二次的調音（軟化）：слуга ~ слу[г’]е　（格変化）

次に、（3）に示すように、出没母音の出現は音韻環境からだけでは予測できない。すなわち、語幹末の /o/, /e/ について、さらに母音が後続すると削除される場合（3a）とそうでないない場合（3b）とが見られる。

(3)　ロシア語における出没母音

a. рот ~ рта; день ~ дни

b. нос ~ н**о**са; семь ~ с**е**ми

スラヴ諸語で見られるこうした現象について先行研究では、実際の発音において観察されない高度に抽象的な基底表示の仮定（Rubach 1984; Morén 2006; Gussman 2007; Scheer & Ziková 2009）や、いくつかの段階において規則・制約の適用が行われる複雑な派生モデル（Rubach 1984, 2003, 2007）によって説明を行ってきた。しかしながらこれらは直接観察できるものではなく、妥当性が問われてきた。

3. 現象分析

本研究では 2 節で提示された問題を解決するため、次のような理論的枠組みによって分析を行う。第一に、基底形における音韻形態には、実際に観察されないような抽象的形態は仮定すべきではないと考える。一方で、基底形は音韻的情報のほかに形態論的情報や、語彙的情報を有しており、これらが音韻現象に影響を与える場合がある。例えば、外来語における音韻現象は従来語のそれとは異なる。こうした非音韻的情報は音韻現象を支配する文法によって考慮されるべきであり、制約文法の枠組みでは、音韻的制約がそうした情報を参照すると考える。その上で、違反可能な制約の順序づけによる、複数の派生段階を経ない生成モデルによって分析を行う。

3.1. 口蓋音化

硬口蓋化は「軟化」・「口蓋音化」ともに同一の制約によって生じると考えられる。すなわち、前舌母音とそれに先行する子音とは、その母音の有する素性に関して一致し、同化しなければならないという制約（以下ではこの制約を AGREE と呼ぶ）が仮定される。後部口蓋子音の場合、語幹末では「軟化」が、語根末では「口蓋音化」が生じ、それ以外の子音では、いずれの位置でも「軟化」が生じる。また、語末ではいずれの子音も硬口蓋化が生じない。このことから、「軟化」・「口蓋音化」のどちらが起こるのか、あるいは硬口蓋化が全く起こらないのかは、軟音あるいは口蓋音の表出を禁止する制約、非音韻的情報に関係する硬口蓋化を禁止する制約、及び AGREE の間の優先度の順序づけによって定まると言える。

3.2. 母音弱化

＜アクセントのない o, e 及びアクセントのないかつアクセントのある音節の直前にない a の表出を禁止する制約＞が＜母音変化を禁止する制約＞よりも優先されると考えられる（cf. Crosswhite 2000）。弱化によって生じる母音は、先行子音の硬軟によって決まる。すなわち、(4) で示すように、硬子音に後続する母音は後舌母音として、軟子音に後続する母音は前舌母音として表出する。

(4) ロシア語における母音弱化

д[а]л ~ д[а]ла vs. р[ʼа]д ~ (в) р[и]ду

上記の現象は、硬口蓋化を引き起こす制約として仮定したAGREEの効果として説明ができる。すなわち、先行する子音の硬軟によって異なる母音弱化に関する規則・制約を仮定する必要はない。

3.3. 出没母音

削除の起こらない母音と異なる特殊な基底形を仮定せず、語彙の特性によって交替が起こるかどうかが決まると考える（Gouskova 2012）。母音削除は、＜母音の表出を禁止する制約＞が＜母音削除を禁止する制約＞よりも優先されるために起こる。なお、前者の制約よりも子音連続に対する制約や＜形態素末にない母音の削除を禁止する制約＞が優先されると考えられる。母音削除の起こらない語彙のみに作用する＜母音削除を禁止する制約＞は＜母音の表出を禁止する制約＞よりも優先される。

3.4. 借用語・外来語における音交替

（5）に示すように、借用語・外来語において音交替が起こらない場合が見られる。これは話者がこうした語彙を他の語彙と区別するためであると考えられる。

（5）　借用語・外来語における音交替の回避
a. 硬口蓋化：резю[м]е; ин[т]ервью（Гловинская 1971: 85）
b. 母音弱化：три́[о]; р[о]к[о]ко́（: 89）

制約文法の枠組みでは、借用語・外来語のみに作用する音交替を禁止する制約が音交替を引き起こす制約よりも優先されると言える。（cf. Ito & Mester 1999, 2001）すなわち、各音交替について借用語・外来語に特有の規則を仮定する必要はなく、語種・語彙に対応した音韻現象を禁止する制約が存在するという包括的原理と、そうした制約の優先度を仮定すればよい。ただし、借用語・外来語の間でも音交替の起こり方が異なる場合がある（e.g. т[ə]ма́тика; н[ə]йтрализа́ция（Аванесов 1984: 221））。このことは、語が借用語・外来語としての語彙特性を失い、本来語化するためであると考えられる。

4. 結論

以上のように、ロシア語の音交替に対して制約文法の枠組みで妥当な説明を与えることが可能である。まず、制約を違反可能とすることで、音交替が起こらない場合についてもそれに応じたより優先度の高い制約を仮定し、一貫した原理によって説明が可能である。形態的あるいは語彙的特性によって音交替の起こり方が異なる場合でも、そうした情報を考慮する音韻的制約を仮定することで、一貫した原理で説明することができる。結果として、先行研究で仮定されてきたような、不必要に抽象的な基底形や複雑な派生モデルは不要であることがわかる。

参考文献（抜粋）

Beckman, J. N. (1997). Positional faithfulness, positional neutralization and Shona vowel harmony. *Phonology*, *14*, 1-46.

Clements, G. N., & Hume, E. V. (1995). The Internal Organization of Speech Sounds. In J. A. Goldsmith, *The Handbook of Phonological Theory* (pp. 245-306). Oxford: Blackwell.

Crosswhite, K. M. (2000). Vowel Reduction in Russian: A Unified Account of Standard, Dialectal, and 'Dissimilative' Patterns. *University of Rochester Working Papers in the Language Sciences*, *Spring 2000* (1), 107-172. Gussman, E. (2007). *The phonology of Polish*. Oxford: Oxford University Press.

Gouskova, M. (2012). Unexceptional segments. *Natural language and linguistic theory*, *30*, 79-133.

Gussman, E. (2007). *The phonology of Polish*. Oxford: Oxford University Press.

Ito, J and Mester, A. (1999). The Phonological Lexicon. In N. Tsujimura (ed.), *The Handbook of Japanese Linguistics* (pp. 62-100). Oxford: Blackwell.

—— (2001). Covert generalizations in Optimality Theory: the role of stratal faithfulness constraint. *Studies in Phonetics*, *Phonology*, *and Morphology*, *7*, 273-299.

McCarthy, J. J., & Prince, A. (1995). Faithfulness and Reduplicative Identity. In J. Beckman, L. Walsh Dickey, & S. Urbanczyk (eds.), *Papers in Optimality Theory* (pp. 249–384). Amherst: University of Massachusetts, GLSA.

Morén, B. (2006). Consonant–vowel interactions in Serbian: Features, representations and constraint interactions. *Lingua*, 116, 1198-1244.

Prince, A., & Smolensky, P. (1993/2004). *Optimality Theory: Constraint interaction in generative grammar*. New York: Blackwell.

Rubach, J. (1984). *Cyclic and Lexical Phonology: The Structure of Polish*. Dordrecht: Foris Publications.

—— (2003). Polish palatalization in derivational optimality theory. *Lingua*, *113* (3), 197-237.

—— (2007). Feature Geometry from the Perspective of Polish, Russian and Ukrainian. *Linguistic Inquiry*, *38* (1), 85-138.

Scheer, T., & Ziková, M. (2009). Havlík vs. Lower: Slavic vowel-zero alternations and a unified phase theory. (FASL 18, Cornell University, Ithaca, 15-17 May 2009.
[http://lolita.unice.fr/~scheer/papers/v2_09_FASL_Cornell_Phases_hdt.pdf])

Watabe, N. (2015). Sound Alternations in Russian and Polish. MA thesis, University of Tokyo.

Аванесов Р. И. Русское литературное произношение. М., 1984.

Гловинская М. Я. Об одной фонологической подсистеме в современном русском литературном языке. // Развитие фонетики современного русского языка (фонологические подсистемы) / Под ред. Л. М. Гаврилова. М., 1971.

Колесов В. В. Историческая фонетика русского языка. М., 1980.

Чекман В. Н. Исследование по исторической фонетике праславянского языка. Минск, 1979.

学会創立 65 周年に際会して思うこと

佐藤純一

ことさらに創立 65 周年などと学会の歴史を云々するのは年寄の性癖で、当面の課題追求や将来の発展を目指す若い方々にはどうでもよいことだと十分承知していますが、今回思いがけず支部長の野中さんからお声が掛かりましたので、私自身の 50 年を超える日本ロシア文学会とのお付き合いの中の出来事を思い出すままにお話しさせて頂きます。

1.

私がロシア語の世界に入ったのは、東京外国語大学のロシア学科に入学した 1950（S25）年 4 月のことで、まさに日本ロシア文学会創立の年と重なります。全くの偶然ですが、思えば不思議なご縁です。

敗戦後の荒廃と貧乏のさなかで、校舎も教材も貧弱でしたが、学生たちは新しく手にした「自由」への期待に溢れていました。大学教育も旧制から新制に変わったばかりの頃でしたが、我々の受けたロシア語教育の実際は現在では想像もつかないような原始的なものでした。参考資料の①をご覧下さい。我々一年生が最初に使った教科書（八杉貞利著『新版ロシア語階梯』のコピーです。これは大正末年に出た『露西亜語学階梯』の戦後の改訂版です。カナ混じり文語文の説明にあらためて驚かされますが、教育勅語や戦陣訓などで文語文を叩き込まれていた我々には特別の違和感はなかったように覚えています。

しかし間もなく朝鮮戦争が始まり、レッドパージの嵐が吹き荒れて、反共・反ソの勢いが強まるようになりました。学生運動も真っ盛りで、ろくに授業も出ずに一年を送りましたので、ロシア文学会のことなど全く気付く余裕もありませんでした。

全学連や代々木の分裂騒ぎに巻き込まれ、幻滅感のうちに運動を離れて、2 年生の後半からロシア語の勉強に再出発した次第でしたが、ロシア語の授業の他に徳永康元先生の言語学と民族学の講義と演習に参加して新しい学問の世界を知りました。4 年生の秋に外語大でロシア文学会の総会が開かれて、先生方が忙しそうにしていたことを覚えていますが、それは学生などが覗くことも出来ないような、恐れ多い集まりといった雰囲気でした。

1964 年春に卒業してすぐ外語大で徳永先生の副手を 1 年勤めた後、翌年に東大の言語学科の大学院に入り、高津春繁、木村彰一、服部四郎など高名な諸先生のご指導に与かり、ようやくロシア語を中心とするスラヴ研究に関わる希望が実現しました。修士論文は古ロシア語の文献資料に即して分詞の形態と用法の総合的な記述の試みでしたが、まだ駆け出しで先行研究の成果を十分利用出来ずにまとめた、お恥ずかしい代物でした。

修士課程を終えた後は暫く外語大で留学生別科の講師として日本語教育を担当しましたが、1962 年に東大教養学部に木村彰一先生を主任とするロシア語教室が新設されて、幸運にもその一員となることが出来ました。新設の第二外国語のロシア語の授業を各クラス週 3 コマ担当するこの教室は、当初は木村先生のほかに北垣信行、米川哲夫の両氏と私の 4 人でスタートしたのですが、折しもガガーリンの宇宙船ヴォストークによる地球一周成功に沸い

たロシア語ブームのただ中で、履修者の増加とともに毎年スタッフが増えて行き、数年のうちに池田健太郎、中村喜和、栗原成郎の諸氏が加わり、ほかに多くの非常勤講師も抱える大所帯になりました。

木村先生と米川さんの推薦を頂いて私が日本ロシア文学会への入会を認められたのは1963 年のことです。また、中村、栗原両氏と東京スラヴ学研究会を立ち上げて諸大学の若手の教師や院生の皆さんと月 1 回の研究会を開くようになったのもこの頃でした。

2.

学会の創立会員でいらっしゃる米川哲夫さん執筆の「学会五十年史」（後述の学会創立 50 周年記念出版『日本人とロシア語』の第 VI 章）によれば、私の入会した 1963 年ごろの学会はまだ「草創期」で現在とは大分様子が違っていたようです。米川さんは創立から 50 年間の学会の歴史を、「草創期」（1950〜1966）、「整備期」（1967〜1981）、「展開期」（1982〜2000）の 3 期に分けて記述しています。参考資料②はこの時期を含む歴代会長の氏名と在任期間の一覧表ですので、ご参照下さい。

「草創期」は八杉貞利、米川正夫、原久一郎の三氏が会長の時期に当たりますが、米川哲夫さんによれば、学界最高の権威者である八杉氏をその弟子たちである米川、原、中村白葉のいわゆる「ロシア文学御三家」が支える体制で、事務は早大の谷耕平（宮坂好安）氏の担当でした。当時新設の日本学術会議の議員選挙対策として急遽かき集められたらしい、恐らく百人に満たないこの「学会」は、「御三家」の経済的な援助によって、1952 年から年 1 回の総会・研究発表会を開き、随時公開講演会を催すなどして、なんとか活動を続けた様子です。1955 年に会報 1 号が編纂発行されましたが、所収の 9 編の論文は 52・53・54 年の 3 回の研究発表から選ばれたものが中心です。添付された会員名簿（会報と同じサイズの表裏 1 枚）には、秋田雨雀に始まり勝田昌二に終わる 100 名の氏名・住所・所属が示されていますが、五十音順に従わない部分が多く、思いつきで名前を羅列・追加した印象を受けます。

1962 年 11 月の第 12 回総会・研究発表会で八杉貞利会長の辞任が承認され、副会長の米川正夫氏が第 2 代会長に選ばれます。八杉先生には名誉会長の称号が贈られました。しかし 1965 年暮れには米川会長が亡くなり、続いて 1966 年 2 月には八杉名誉会長も逝去という予想外の事態となりました。1966 年 10 月に早大で第 16 回総会・研究発表会が開催され、監事の原久一郎、中村白葉両氏が会長候補となり投票が行われました。両氏の得票が同数でしたが、中村氏の申し出により、同年ながら生まれ月の早い原氏が第 3 代会長に就任した経緯があります。そのためか、原氏は翌 1967 年の第 17 回総会・研究発表会（於東北大）で辞任を申し出られ、後任に中村氏を推薦されたので一同が了承し、同氏が第 4 代会長に就任されました。原氏は第一線を退き顧問となりますが、こうした濃密な人間関係が草創期の学会の活動の背後に感じられます。

以上はすべて米川さんの「学会五十年史」によったもので、私自身は入会後数年間の学会の出来事もよく覚えていない始末ですが、手許の『日本ロシヤ文学会会報』第 6 号（1963）を見ると、掲載の論文 5 本の執筆者は笠間啓治、安井亮平、法橋和彦、漆原隆子、川崎浹の各氏（掲載順）で、すべて私と同世代の方々なので、この頃から研究者の世代交代がはっきり感じられるようになったと思われます。

3.

一年以上前と思いますが、野中さんから関東支部設立の経過についていろいろお問い合わせがあったのですが、「正確なことはわからないが、他の支部が次々と作られて行く中で、最後に残った関東支部の会員をまとめる形で支部として正式に発足したように記憶している」とお答えするのが精一杯でした。しかし、これまた米川哲夫さんが学会誌『ロシア語ロシア文学研究』33 号（2001）に寄せられた「支部設立の経緯と活動」（pp. 170－173）を読み直して、いろいろなことが分かってきました。

米川さんによれば、関東支部の存在を窺わせる事実は 1968 年から存在するとのことですが、設立の公式な記録は見当たらず、会員名簿でも 1973 年度分に和久利誓一氏が関東支部長と記されているのが最初とのことです。つまり、事実上存在しながら、正規の支部として扱われることのなかった「関東支部」がこの頃から公式化するのですが、そのきっかけは、同じ米川さんが「学会五十年史」（p. 411）で触れているように、創立以来学会事務局の責任者として学会の活動のまとめ役だった早大の谷耕平（宮坂好安）教授の定年退職に伴い、その後の事務局体制をどうするかの問題に関わっていたように思います。

中村新会長は会員の世代交代に積極的に対応し、会則の改正や学会賞創設などを進める姿勢を示されたようですが、1968 年から翌年にかけて全国の諸大学に吹き荒れた大学紛争の嵐は会員の研究や学会活動にもいろいろな障害をもたらしました。

1971 年秋に早大で開催された第 21 回総会・研究発表会で 2 年前から懸案だった会則の改正が実現し、現行のものに近い新会則が採択されたのも大学紛争を体験した会員たちの意識を反映したものと言えるでしょう。1972 年の総会では翌年から東京外大が学会事務局を担当することが承認されています。そして 1973 年 4 月に早大から東外大に事務局が移り、和久利誓一教授が事務局長に就任しました。そしてその秋の総会で、東外大、東大、上智大、早大の 4 校が 2 年ずつこの順序で事務局を担当する輪番制が承認されました。74・75 年度の東外大から一周して 81・82 年度の東外大の担当の後の 83・84 年度は東京工大が担当しましたが、それは一度限りだったようで、その後は上記 4 校の輪番が続きました。しかし、東外大担当の 07・08 年度に続く 09・10 年度は創価大が担当し、続く 11・12 年度は同志社大が担当しています。13･14 年度は早大の担当でしたが､15 年度からは千葉大が担当しており、当初の輪番の 4 校以外に事務局を担当する大学が増えたことは歓迎すべき事実です。

さて、関東支部の問題ですが、上述の米川さんの「支部設立の経緯と活動」によれば、1973 年の東外大への事務局移転と連動して、その秋には初めて（正規の）関東支部総会が開催されて、支部長に東大の木村彰一教授が選出されました。

一方他の多くの支部はその遥か以前に設立が承認され､活動を始めていました。すなわち、学会創立 3 年後の 1953 年には関西支部がスタートして、1955 年秋の第 5 回総会・研究発表会は大阪外大で開催されました。そして 1961 年 9 月に北大で開催された第 11 回総会・研究発表会では北海道支部の設立が承認されて、関西と北海道の 2 支部体制が始まりました。

その後 1967 年秋の第 17 回総会（於東北大）では東北支部の設立が承認されましたが、それに続き、中部支部の設立総会が 1968 年 6 月に愛知大で行われています。

米川さんの引用する初代中部支部長の胡麻本鳶一氏の回想文によれば､「仙台での理事会での要望にこたえて、一大決心の下に関西、北海道、東北、関東に続く 5 番目の支部設立に至った」とのことです。つまり、中部支部設立より前に関東支部があったということになり

ますが、実はその記録はなく、関東支部と思われていたものは、本部事務局直属の部分の一部に過ぎなかったものと思われます。

それはともかく、一番新しいのは 1984 年設立の西日本支部で、これに属する中国・四国・九州地方の諸大学の会員は、それまでは関西支部には加わらず、関東の会員同様本部直属の形だったということですから、現在確立している支部制度はやっとこの頃に整ったということでしょう。

そういうわけで、関東支部としての正式の活動は 1973 年からと考えざるを得ませんが、木村支部長が 75 年秋に学会会長に就任された後は、支部長は東郷正延氏（75〜81 年度）、和久利誓一氏（81〜85 年度）、米川哲夫氏（85〜89 年度）、原卓也氏（89〜93 年度）のように交代します。そして、何時のことだったか記憶がありませんが、新潟の諸大学の会員の中部支部から関東支部への所属の変更の申し出があり、理事会で承認されて今日に至っていることにもご注意下さい。

和久利支部長の下で、関東支部からの理事その他の役員の選出規定や、支部運営委員会の設置、支部事務局の担当校や輪番制、研究発表会の実施要領などが決まり、支部活動が軌道に乗って行きます。そして米川支部長の下で 1988 年からは、支部の研究発表会は修士・博士論文の提出者に自分の論文についての報告を募る形に統一することが決まり、現在に至っています。つまり今日のような研究発表会は 1988 年以来のものです。

また、関東支部の事務局は本部事務局担当の 4 校を除く諸大学が担当することになり、当初は東京工大、一橋大、東海大、埼玉大、千葉大などにお世話になりましたが、その後は創価大、慶大、筑波大、法大、新潟大なども担当校に加わって頂いているのは有難いことです。

4.

1988 年秋に米川哲夫さんが第 8 代会長に選出・就任されて、それ以前の八杉先生以来和久利先生に至る我々の師に当たる方々の世代から、より身近な先輩・同僚が会長になる時代となりました。つまり我々の出番の時期となったわけで、理事会でいろいろな提案をして認められる機会が増えてきました。私が提案やその実現に直接関わった活動の中でとくに思い出の深い二つについてお話させて頂きます。それは用語委員会と、学会創立 50 周年記念事業のメインとなった『日本人とロシア語』の編集出版についてです。まず用語委員会の方からお話しいたします。

1988 年秋の第 38 回総会で用語委員会の設置に関する理事会の提案が承認されましたが、この委員会の使命は初歩のロシア語教育に用いる文法用語の改善・統一について必要な検討を進め、具体案を作成することでした。それを受けて同年 12 月の理事会で委員長に私が指名され、理事の山口巖氏が委員に加わるほか、会員から数名の委員を委嘱するよう決定されました。そこで私から森安達也氏と米重文樹氏の了承を得て、その旨を事務局に報告し、この 4 名による用語委員会が正式にスタートしました。私としてはギリシャ・ラテン文法に詳しい山口・森安両氏と一般言語学に通じた米重氏との共同作業が是非必要と考えた次第でした。

戦前からの伝統を継いだ当時のロシア語の教科書や文法書には、著者による用語の様々な相違とともに、ロシア語仲間の間でしか通用しない「体」（完了体・不完了体・活動体・不活動体･一回体･多回体等々）や、「形動詞」、「副動詞」などをはじめ、страдательный を「被

動」としたり、синтаксис を「文章論」や「文論」とするような古い用語が溢れていました。これはいわゆるジャルゴン（職業上の通用語）として、仲間意識を強める一方で、ロシア語の初歩の学習者の違和感や反撥をそそり、学習意欲を失わせる恐れがあります。それで学習者の大多数が慣れ親しんでいる英文法の用語を出来るだけ採り入れる一方で、ロシア語独特のものはなるべく分かり易い用語にする工夫が必要と思いました。

我々は頻繁に連絡を取り合ってお互いの意見を確かめながら、問題点を指摘し会員の関心を高めるために「用語委員会資料」を年 1 回まとめて、1989 年の 1 号から 1992 年の 4 号までを全会員に送りました。1 号では инфинитив ないし неопределённая форма に対応する用語（不定法・不定形・不定詞など）の選択、2 号では сослагательное наклонение に対応の用語（接続法・仮定法・条件法など）の選択、3 号では「運動の動詞」、「定動詞・不定動詞」のセットの可否と代案、4 号では「形動詞」、「副動詞」に「被動」・「能動」と「現在」・「過去」を添えた「被動形動詞過去」などの用語の可否と代案について、4 人のそれぞれの考えを示しました。資料の各号では個々の場合について代表的な諸著作での使用例の一覧と英独仏語の文法や教科書での対応例が添えてあります。

なお、1992 年 8 月には 1 号から 3 号で扱った用語の問題に対し、18 人の会員を対象とするアンケート調査を実施して、その結果を 4 号で報告しています。簡単に紹介すれば、それぞれ「不定形」、「仮定法」、「移動の動詞」と「定動詞・不定動詞」への賛成が多数という結果でした。

そして 1993 年発行の 5 号は「初歩の教育に用いる用語のガイドライン」と銘打って基礎的な用語約 200 語を和－露の形にまとめて示しています。この第一次ガイドラインの公表をもって我々 4 人の用語委員会は任期満了し、新たに伊東一郎、桑野隆、中澤英彦、沼野充義、村田真一、森俊一の若手 6 氏による第二次用語委員会が発足し、桑野氏が委員長に就任しますが、引継ぎのため私もメンバーに加わりました。

第二次用語委員会は 1995 年に「初歩の教育に用いる用語のガイドライン（第 2 版）」を完成公表しますが、これは最初のガイドラインを全面的に再検討するとともに、露－和の形にしたものです。そしてその翌年 1996 年に露－和と和－露の両方をまとめた『初歩のロシア語教育に用いる用語のガイドライン』が完成し全会員に配布されました。お手元の参考資料③はその表紙と最初のページのコピーです。なお、用語委員会はその使命を果たして 1997 年に解散が承認されました。

5.

次は『日本人とロシア語』についてお話します。

参考資料④は、学会誌『ロシア語ロシア文学研究』第 32 号の学会創立 50 周年記念特集記事からのコピーで、「学会創立 50 周年を迎えて」と題する私の挨拶と、「『日本人とロシア語―ロシア語教育の歴史』の刊行について」という記念事業実行委員長の中村喜和さんの文章が並べてあります。

まだ 15 年前のことですので、ここにいらっしゃる大部分の方々がご記憶のことと思いますが、創立 50 周年を迎えた 2000 年には学会の総力を結集して日本におけるロシア語の研究教育の歴史と現況をまとめた『日本人とロシア語』を公刊し、東京外国語大学での第 50 回総会・研究発表会では、記念の講演会を催したほか、歴代会長をはじめ創立会員の方々や、

多くの来賓をお招きして盛大な祝賀の宴が行われました。たまたま当時の会長としてその主催者となった我が身の幸運を忘れたことはありません。

1992 年以来 8 年にわたる記念事業実行委員会のメンバーの皆さんのお名前をここに挙げてあらためてお礼を申し上げる次第です。五十音順で、井桁貞義、岩井憲幸、宇多文雄、金沢大東、金田一真澄、工藤精一郎、左近毅、澤田和彦、中澤英彦、中村喜和、原卓也、源貴志、安村仁志、山口巖、米川哲夫、渡辺雅司の皆さんです。そして行き届いた編集を担当され、立派な装丁や内容に相応しい表紙カバーのデザインに至るまでお世話下さった、ナウカ社の宮本立江さんにこの場であらためて厚くお礼を申し上げる次第です。皆さんご存じと思いますが、宮本さんは我が学会の古くからのメンバーでいらっしゃいます。

参考資料⑤の 2 枚は『日本人とロシア語』の凡例と目次のコピーです。初めてご覧になる方もいらっしゃるかと思いますが、その内容と執筆者の多彩さに驚かれることでしょう。

私の「講演」はこれで終わりですが、先の知れない老人としては、これからさらに 70 周年、80 周年を迎えて行く我が学会の活動分野の拡大・発展・進化と会員の皆さんの専門分野での活躍を心からお祈りするばかりです。そしてこの夏の ICCEES の幕張大会の成功をお祈りして、これが日本のロシア・スラヴ研究に新しい刺激を与え、新しい研究分野の開発につながるよう期待をふくらませています。

第　三　課

名詞ノ格及變化

I. 名詞ニハ性ト數ノ外格ノ性質アリ．ソレニヨリテ語尾ヲ變化ス．露語ノ名詞ハ六個ノ格ヲ有ス．即

1)主格 2)生格 3)與格 4)對格 5)造格 6) 前置格
（ガ　ノ　ニ　ヲ　ニテ）

コノ中ニ最初ノ四格即主生與對ハ極メテ大體ニ言ヘバ日本語ノ手爾遠波 ガ，ノ，ニ，ヲ ノ關係ヲ示スモノナリ．造格ハ「ニテ」「ヲ以テ」ナドノ意ヲ示ス

〔例〕 топóр 斧　　造格 топорóм 斧ニテ，斧ヲ以テ

前置格ハ，コノ格ノ形ハソノ前ニ或ル前置詞例ヘバ o（就テ），в（内ニ），на（上ニ），при（際シテ）ノ如キモノヲ附セザレバ，即チ單獨ニハ使用スルコト無キガタメニコノ名アリ．

o столé 机ニ就テ　　в столé 机ノ内ニ
на столé 机ノ上ニ　　（机 стол）

露語ノ名詞ハ性ノ異ルニヨリテ異リタル語尾ヲ有ス（第一課）．而シテ又ダ一ノ名詞ハ單複兩數ノ區別ト上記ノ六格トニヨリテソレゾレ異リタル語尾ヲ有ス．語ヲ變ヘテ言ヘバ一個ノ名詞ハ十二箇ノ語尾ヲ有スルナリ（尤モソノ内ニ相均シキモノアリ）．

單數主格ヲ基礎トシテソノ他ノ諸格及複數ノ形ヲ造ルコトヲソノ名詞ヲ變化ストイフ．

注意 (1) 文法ノ變化ヲ示ス場合ニハ格數ノ略語ヲ用フ

例　單主＝單數主格
　　複生＝複數生格

單造＝單數造格

(2) 單數主格ヲ名詞ノ原體ト稱ス．形容詞代名詞ニ於ケルニ同ジ．動詞ハ不定法ヲ以テ原體トス．

II. 上記ノ六格ノ外ニ呼格アリ．呼ビカクルニ用フル格ナルガ，之ハ僅少ノ例外ヲ除キテハ主格ヲ用フル故ニ別ニ區別スルニ及バズ．

офицéр！ 士官ヨ　　Профéссор！ 教授ヨ

III. 名詞ハ單數主格ニ於テ（第一課）

男性	硬子音	ь	й
中性	o	e	мя
女性	a	я	ь

ノ語尾ヲ有ス．コノ内ニテ男性ノ全部ト中性ノ内 o 及 e ノ語尾ヲ有スルモノトハ大體ニ於テ同一樣ノ語尾ヲ以テ變化スルタメニ之ヲ取纏メテ名詞ノ第一式變化ト稱ス．次ニ女性ノ a 及 я ノ語尾ヲ有スルモノヽ變化ヲ第二式トシ，女性ニテ ь ノ語尾ヲ有スルモノヽ變化ヲ第三式，最後ニ中性 мя ヲ第四式トス．

第一式　男性 硬子音 ь й　中性 o e
第二式　女性 a я
第三式　女性 ь
第四式　中性 мя

IV. 名詞變化第一式及第二式ニ於テハ硬軟ノ二種ヲ區別ス．硬變化ハ原體及ビソノ他ノ格ノ語尾ガ主トシテ硬母音ヲ有スルモノニシテ，軟變化ハ之ニ對應スル軟母音ヲ有

講演参考資料②　歴代会長氏名・在任期間一覧

1　八杉貞利（1950~1962）
2　米川正夫（1962~1965）
3　原久一郎（1966~1967）
4　中村白葉（1967~1974）
5　木村彰一（1975~1981）*
6　東郷正延（1981~1985）
7　和久利誓一（1985~1989）
8　米川哲夫（1989~1993）
9　原卓也（1993~1997）
10 佐藤純一（1997~2001）
11 川端香男里（2001~2005）
12 井桁貞義（2005~2009）
13 沼野充義（2009~2013）
14 望月哲男（20013~）

* 1977年に「会長任期は4年とし1期のみ」とする会則改正があり、それに従って再選され、都合6年間在任した。

初歩のロシア語教育に用いる用語のガイドライン

日本ロシア文学会　1996年

初歩のロシア語教育に用いる用語のガイドライン

1996年10月　日本ロシア文学会　用語委員会

この用語集は、ロシア語の初歩の教育のための教科書・教材・参考書などのなかで統一的に用いるのが望ましいと考える術語を掲げたものであるが、議論の余地のある場合については若干の注記を付してある。［　］内に示したのは可能な言い換えであり、矢印で別語を指し示している項目は、慣用としては認めるが、いずれ別語(矢の前方の語)に変えるのが望ましいものであり、また、×印を付したものは使用を避けるべき用語である。

＊このようなガイドラインを設定する主旨は、あくまでも、初歩の学習者の側に無用の疑問や混乱を引き起こすことを避けるために最小限の統一が必要と考えるからであって、教授者の創意や工夫を否定し、画一的な用語の使用を強制する意図に立つものではない。

＊この用語集に関する疑問や意見を今後とも日本ロシア文学会に寄せられるよう希望する。

ロシア語　→　日本語

алфавит　アルファベット
аффикс　接辞
бездополнительный непереходный глагол　自動詞
безличное предложение　無人称文[非人称文]
безличное сказуемое　無人称述語[非人称述語]
безличный глагол　無人称動詞「非人称動詞]
будущее время　未来
буква　文字　（×字母）
вводное слово　挿入語
вещественное имя существительное　物質名詞
виды глагола　アスペクト[動詞の体]
винительный падеж　対格
возвратное местоимение　再帰代名詞
возвратный глагол　再帰動詞
вопросительное местоимение　疑問代名詞
вопросительное наречие　疑問副詞
время　時制（←時称）
второе лицо　2人称
второстепенные члены предложения　文の二次成分
главное предложение　主節（←主文）
главные члены предложения　文の主成分
глагол　動詞
глаголы движения　移動の動詞[運動の動詞]
глаголы перемещения　移動の動詞[運動の動詞]
глагол с -ся　ся動詞
гласная буква　母音字
гласный звук　母音
глухой согласный　無声子音
грамматическая категория　文法カテゴリー（←文法範疇）
губной согласный　唇音
дательный падеж　与格

学会創立50周年記念特集

学会創立50周年を迎えて

会長 佐　藤　純　一

1950年7月11日創立の我が学会が50周年を迎える記念すべき年に当たり，会員各位とともに，学会の活動の軌跡を確かめ，日本におけるロシア語学文学研究のさらなる発展拡大をめざして，我々自身の認識と抱負を新たにする機会を持ちたいものと，かねがね願って参りました。今年度の総会・研究発表会の一連の行事に含めて，創立50周年記念の講演会や祝賀会を開催できますことは，まことにご同慶の至りです。

また，記念事業として学会の総力を挙げて取り組んだ，本邦におけるロシア語の教育研究の歴史の編纂企画が，ここに『日本人とロシア語――ロシア語教育の歴史』の大冊となって実を結び，200年を超える日本人とロシア語の関わりの実態と我が学会の50年の活動の記録が公刊されますことは，我が国の外国語研究の分野における重要な貢献であるとともに，近現代の日本文化史の知られざる側面を語る興味深い資料として，画期的な業績と確信します。

学会の創立会員であり，理事，関東支部長，会長を歴任された学会顧問の米川哲夫東大名誉教授の執筆にかかる「学会五十年史」の章は，歴史家としての筆者が自ら経験されたプロセスを，当時の事務局の記録や関連資料によって正確かつ簡明に叙述されたものです。現在の学会運営に責任を負う理事・評議員の方々にとって必須の知識の共通の源泉であるばかりではなく，老若を問わず会員すべてが学会の歴史を共有できる基盤を与えられた米川顧問のご尽力に学会を代表して御礼申し上げます。

歴代会長のうち，六代東郷正延，七代和久利誓一の両先生はそれぞれ92歳と88歳のご高齢にもかかわらずご健在で，この度の記念事業についても顧問として数々のご助言を頂きました。

続く八代米川哲夫先生は1992年，当時の会長として創立50周年記念事業の企画を決定推進され，前述の通り自ら執筆の労を執られました。九代原卓也先生は1994-97年度の4年間にわたり会長として事業推進の中心的な役割を果たされました。たまたま両先生の後を継ぐ私が，今回の華やかな記念行事を執り行うめぐり合わせとなりましたが，この成果は両先生はじめ歴代の担当理事，実行委員，執筆者各位の永年の献身的なご尽力の賜物であり，ここに更めて深甚の感謝と敬意を表する次第です。

21世紀の日本におけるロシア語学文学研究の前途は，これまでの伝統や実績とは質的に異なる大きな飛躍を予想させます。最近の大学をめぐる変化と若い世代の有力な研究者の台頭は新しい多くの可能性を示すものです。新しい時代の要請に応える研究体制の確立と多様化する研究情報のネットワークの整備に向けて，学会が主導性を発揮して行くための大きな転換の必要を感じる所以です。創立50周年の節目に当たり，我が日本ロシア文学会の新たな飛躍発展を心から祈念するものです。

『日本人とロシア語――ロシア語教育の歴史』の刊行について

記念事業実行委員会委員長　中　村　喜　和

記録を繰ってみると，本学会が創立50周年を迎えるのをメドに，日本におけるロシア語教育の歴史を回顧して1冊の本にまとめ将来の指針を打ち出す一助にしよう，という案がロシア文学会の総会に提出されたのは1992年のことである。この提案は異議なく総会で承認された。さっそく学会創立50周年記念事業実行委員会が組織されることになり，まず7人の理事が選任され，若手会員の中から7人が選ばれ，学会の会長がex officioでこれに加わり，計15名で委員会が発足した。委員長にはこの企画の発案者である佐藤純一氏が就任した。

委員会がまず取り組んだ作業は長老会員からの聞き取りである。1993年から95年までのあいだに次の方々の回顧談をうかがい，録音テープに収めた。新谷敬三郎，金子幸彦，久保二郎，東郷正延，野崎韶夫，和久利誓一，笠原一男，倉橋健。このうち最後の2氏は会員ではなく，第二次大戦中に陸軍慶語教育隊でロシア語を学んだ経験の持ち主である。この録音テープはその後の本文の執筆に利用されることになる。

最初に立てられた本書の構成は以下のとおりである。

第1章　ロシア語事始め
第2章　初期のロシア語教育
第3章　戦前・戦中のロシア語教育
第4章　戦後のロシア語教育
第5章　ロシア語辞書の歴史
第6章　教科書・参考書書誌
第7章　学会50年史

そのほかに，年表と索引など。

この大枠は結局最後まで変わることなく維持されることになった。むろん，各章の内容は当初の予定に比べて年を追うごとに次第に充実したことは言うまでもない。今では，主要な事象はすべて網羅し得たのではないかと自負している。およそロシア語教育に関わった学校・施設・メディア，さらには特異な教育者についてはすべて項目を立て，それぞれ最も関係の深い会員に執筆を依頼した。たとえば，大学についてはその大学の卒業生あるいは当該大学で教壇に立っている方々にお願いする方針をとった。また，ロシア語やロシア文学の専門学科をもたない大学に関してはアンケート調査を実施したこと，市民対象の成人教育や高校レヴェルでの教育も視野に入れたこと，ラジオ・テレビの講座に言及したことなどが特筆に価しよう。

1997年に佐藤純一氏が文学会の会長に選出されたのにともない，その後は中村喜和が委員長を引継ぎ，実務を担当する理事の金田一真澄氏とともに編集の仕事にあたっている。

本書の出版ははじめ，O社が引き受け部分的に組版までですすんでいたが，1999年の春にいたって不況のあおりを受け同社が倒産してしまった。その後，紆余曲折の末に版元が現在のナウカ社に落ち着いた。刊行は9月中の予定である（A5判，約500ページ，ハード・カヴァー，本体価格5000円，ナウカ書店で発売）。

凡　例

1）本書の執筆者はすべて日本ロシア文学会の会員である。

2）本書の構成は、日本ロシア文学会創立50周年記念事業委員会において立案され、それぞれの項目に関してもっとも関係の深い会員に執筆を依頼したものである。

3）本書の第Ⅱ章から第Ⅳ章までは、主としてさまざまな教育機関＝学校を中心とする記述である。これらの各章の各節の執筆にさいしては、原則として、①各学校の沿革、②最盛時の教員構成、学生数、カリキュラム、教育方針上の特色、③主要教員（業績・逸話など）、④主要な出身者、さらに、⑤記念出版物、参考資料などに言及するよう執筆者に要請した。しかし、概して各学校間で分量の点で公平が保たれるよう配慮したことを除けば、寄せられた原稿に対して委員会はまったく手を加えていない。

4）当初の計画では、外国の固有名詞の表記についてはある種の合理的な基準を設けて統一を行なう予定であった。しかし、たとえば Харбин / Harbin について「ハルビン」「ハルピン」「哈爾濱」などの表記がいずれも慣用として通行している現状に鑑み、画一化を断念せざるを得なかった。ロシアのすべての人名、地名についても同様である。ただし、便宜上、索引においてはもっとも使用頻度の高い項目に一元化し、参照記号を用いてヴァリアントを示した。

5）委員会としては、すべての章を通じて用字・用語についていかなる制限も設けなかった。

目　次

まえがき
凡　例

第Ⅰ章　ロシア語事始
先駆者たち……岩井　憲幸　3
遣露伝習生など……中村　喜和　26

第Ⅱ章　初期のロシア語教育
宣教師ニコライ……長縄　光男　31
旧東京外国語学校……渡辺　雅司　39
蜷峨寿安……左近　毅　50
東邦協会露西亜語学校とその系列……左近　毅　55
その他の諸学校……沢田　和彦　58
二葉亭四迷……源　貴志　63

第Ⅲ章　戦前・戦中のロシア語教育
東京外国語学校露語部……渡辺　雅司　73
旧制早稲田大学露文科……井桁　貞義　96
大阪外国語学校露語部……沢田　和彦　109
天理外国語学校露語部……岡林　宏侃・大谷　深　124
哈爾濱学院……工藤精一郎　140
善隣協会専門学校……佐藤　純一　161
東大・一高その他……佐藤　純一　166
終戦までの関西……佐藤　純一・山口　巌　169
終戦までの北海道……栗原　成郎　173
ニコライ・ネフスキイ……檜山　真一　177
陸軍幼年学校……清水　俊行　180
陸士・陸大など……佐藤　純一　189

陸軍露語教育隊……佐藤　純一　192
海軍兵学校その他……井上　研二　197

第Ⅳ章　戦後のロシア語教育
大学のロシア語教育
北海道大学……灰谷　慶三　203
札幌大学……相馬　守胤　209
岩手大学……笹尾　道子　214
筑波大学……阿部　軍治　217
埼玉大学……沢田　和彦　220
東京外国語大学……原　卓也　223
早稲田大学……高野　雅之　229
上智大学……宇多　文雄　235
東京大学……佐藤　純一・長谷見一雄　241
創価大学……佐藤　純一　246
東海大学……佐藤　靖彦　248
新潟大学……黒沢　岑夫　250
県立新潟女子短期大学……水上　則子　253
富山大学……矢沢　英一　257
中京大学……安村　仁志　259
京都大学……山口　巌　262
京都産業大学……植村　進　265
大阪外国語大学……法橋　和彦　269
神戸市外国語大学……井上　幸和　275
天理大学……岡林　宏侃・小畠　雅敏　278
広島大学……井上　研二　283
北九州大学……戸辺　又方　285
放送大学……金沢美知子　287
全国の大学へのアンケート調査……佐藤　純一　289

専門学校・高等学校のロシア語教育
東京ロシア語学院……金沢　大東　310
ニコライ学院……米重　文樹　316
慶應外国語学校……金田一真澄　318
マヤコフスキー学院……桑野　隆　320
早稲田大学高等学院……狩野　亨　322
高校その他……佐藤　純一　323
放送メディアによるロシア語教育……宇多　文雄　327

第Ⅴ章　ロシア語辞書の歴史
ロシア語辞書の歴史……岩井　憲幸・米重　文樹　333
ロシア語辞典略年譜（1871－1998）……米重　文樹　351

第Ⅵ章　ロシア語学関係書分類目録
佐藤　純一・金田一真澄・中澤　英彦　361

第Ⅶ章　学会五十年史……米川　哲夫　397

ロシア語教育関連略年表……佐藤　純一　427
人名索引……431

装幀　志賀紀子

カヴァー（表）　«Букварь» К. Истомина　（写真　広川泰士）
〃　（裏）　大黒屋光太夫関書　桂川甫周編　『北槎聞略』
表　紙　И. Билибин
見返し（表）　«Букварь» Ф. Поликарпова
〃　（裏）　В. Васнецов, И. Билибин

〈関東支部事務局からのお知らせ〉

支部事務局では、学会名簿にアドレスが掲載されている会員への諸連絡をメールで行うようにしております。メールの変更がありましたら、支部事務局にご一報くださるようお願い致します。

引き続き葉書による通知を希望される方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

なお、2016 年 1 月より関東支部事務局は埼玉大学に移ります。

住所：338-8570　さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学・人文社会科学研究科・野中研究室内　日本ロシア文学会関東支部事務局
E メール：robunkanto@gmail.com; nonaka@mail.saitama-u.ac.jp
電話： 048-858-3759　ファックス：048-858-3685

日本ロシア文学会関東支部報第 33 号
2015 年 10 月 15 日発行
発行・編集　野中進・斎藤陽一
発行元　日本ロシア文学会関東支部
発行所　新潟大学人文学部斎藤陽一研究室気付 日本ロシア文学会関東支部事務局
〒 950-2181　新潟市西区五十嵐二の町 8050
Tel. 025-262-6536
E-mail:robunkanto@gmail.com
印刷所：松籟社

日本ロシア文学会関東支部規約

1988 年 10 月　制定
2015 年　6 月　最終修正

第 1 条　本支部は日本ロシア文学会関東支部と称する。
第 2 条　本支部は日本ロシア文学会の会則に基づいて，その目的達成のために独自に次のような事業を行う。
（1）共同の研究ならびに調査。　（2）研究発表会・講演会の開催。
（3）機関誌の発行。　（4）その他本支部の目的を達成するために必要な事業。
第 3 条　本支部は原則として，関東地方および新潟県在住の日本ロシア文学会会員をもって組織する。
第 4 条　本支部について次の機関をおく。
（1）総会　　（2）運営委員会
第 5 条　総会は本支部の最高議決機関であり，毎年 1 回開催するものとする。ただし必要に応じて臨時総会を開くことができる。総会の議決は出席会員の過半数によって成立する。
第 6 条　運営委員会は支部長と運営委員をもって構成し，支部の運営にあたる。
第 7 条　本支部に次の役員をおく。
（1）支部長　（2）運営委員　（3）事務局長　（4）監事
第 8 条　支部長は支部選出の理事の互選により選出する。
第 9 条　支部長は本支部を代表し，支部の運営を統轄する。
第 10 条　運営委員は，別に定める選出規定により選出する。
第 11 条　運営委員は，運営委員会を構成し，支部の運営を分担する。
第 12 条　事務局長は，支部事務局担当大学選出の運営委員とし，会計・事務を担当する。
第 13 条　監事は，別に定める選出規定により選出する。
第 14 条　監事は，年度末に会計監査を行い，総会でその報告を行う。
第 15 条　役員の任期は 2 年とし，重任を妨げない。
第 16 条　本支部の経費は会費，補助金その他の収入をもってこれにあてる。
第 17 条　会費に関する規定は別に定める。
第 18 条　本支部は，事務局をおき，本支部の会計および事務全般を委ねる。事務局設置の規定は別に定める。
第 19 条　運営委員会は毎年決算報告を作成し，総会の承認を求めなければならない。
第 20 条　本支部の会計年度は 10 月 1 日に始まり，翌年 9 月 30 日をもって終わる。
第 21 条　本規約の改正および諸規定，内規の制定・改正は総会の議決による。

支部規約に関わる規定

1）　第 10 条に関わる運営委員選出規定
支部事務局分担大学所属会員，および関東地方と新潟県にある日本ロシア文学会事務局分担大学所属会員がそれぞれの大学から 1 名の委員を選出したのち，支部長とそれら委員が上記大学所属会員以外から若干名選出する。

2）　第 13 条に関わる監事選出規定
監事は，支部会員から 2 名を支部長が指名するものとする。

3）　第 15 条に関わる会費規定
年額 1000 円とする。会費の改訂は支部総会の承認を要するものとする。

4）　第 16 条に関わる事務局設置規定
支部事務局は，関東地方と新潟県にある大学のうち，原則として所属会員が 2 名以上いる大学が協議の上，もちまわりで適宜順番を決め，2 年ずつ担当する。ただし日本ロシア文学会事務局分担大学はこの限りでない。

5）　第 8 条に関わる理事候補選出規定
支部選出の理事候補については、支部総会で承認を受けた選挙管理委員会が選挙を実施する。支部選出分 14 名のうち、10 名は選挙結果に基づいて選び、4 名は支部長が運営委員会の承認を得た上で指名するものとする。ただし、選挙結果によって選ばれる 10 名分については連続三選を認めない。なお、この規定は 2017 年度の理事選挙から適用される。